

# ギッシング『ネザー・ワールド』のクラーケンウェル考

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2020-11-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小宮, 彩加 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/21239">http://hdl.handle.net/10291/21239</a>

## ギッシング『ネザー・ワールド』の クラークンウェル考

小 宮 彩 加

ジョージ・ギッシングの『ネザー・ワールド』（1889）は、ある3月の夕暮れ時にロンドンの Clerkenwell Green に旅の姿の老人が現れ、街の中を歩く様子の描写で始まる。

In the troubled twilight of a March evening ten years ago, an old man, whose equipment and bearing suggested that he was fresh from travel, walked slowly across Clerkenwell Green, and by the graveyard of St. James's Church stood for a moment looking about him. (*Nether*, 2)

さらに続く情景描写では、この老人が St. James's Church の墓地を通り抜け、St. James's Walk を通り、Middlesex House of Detention まで来て、その入り口のアーチ門を見上げたと書かれている。それから近所のパブで「スノウドン」という名前の彼の親類がこの辺りに住んでいるはずだが知っているか、と問い合わせるのだ。

Clerkenwell Green や St. James's Church をはじめ、ここで出てくる地名はいずれもロンドンのクラークンウェル地区に実在するものである。『ネザー・ワールド』の舞台はクラークンウェル一帯であり、登場人物たちはいずれも皆、Clerkenwell Green を中心とした半径2キロ以内に住み、仕事もしている。そして興味深いことに、『ネザー・ワールド』の登場人物たちが

歩く通りも、住んでいる道も地図に記すことができるほど正確に舞台設定されているのだ。

なぜ、ギッシングがこれほど詳しくクラークンウェルを描写できたのかと言えば、それは彼がクラークンウェルのすぐ近くに住んでいたことがあるからだ。ギッシングはヨークシャーのウェイクフィールド出身だが、1879年にロンドンに出てきてからはクラークンウェルからほど近いブルームズベリーやイズリントン、カムデンの下宿を転々としていた。中でも1879年11月から約1年間、妻と暮らしたイズリントンの5 Hanover Streetの家はクラークンウェルからCity Roadという通りを隔てただけのところにあった。<sup>1</sup>ギッシングは自分の住んでいた場所を小説の舞台として使うことが多いのだが、Hanover Streetも『ネザー・ワールド』の中で、マイケル・スノウドンと孫娘ジェインの住まいとして登場している。

Hanover Street lies to the north of City Road; it is a quiet byway, of curving form, and consists of dwellings only. Squalor is here kept at arm's length; compared with regions close at hand, this and the contiguous streets have something of a suburban aspect. (Nether, 64-65)

クラークンウェルのスラム街から少し距離をおいた閑静な住宅街の Hanover Street を拠点に、彼らはクラークンウェルの貧民救済の慈善活動に勤しむのである。

『ネザー・ワールド』を執筆していた当時のギッシングの住まいはクラークンウェルではなく、少し離れたマリルボンの7.K Cornwall Residence だった。ちょうど現在の地下鉄ベイカー・ストリート駅のあたりに1872年から1876年の間に建てられた6階建てのマンションである(写真1)。<sup>2</sup>19世紀

1 現在では60 Noel Road となっている。

2 ギッシングはここに1884年から1891年まで住んでいた。

後半は、高層の新しいタイプの集合住宅が次々と建設された時期である。英語の“mansion”は「大邸宅」という意味なので、集合住宅のことを日本で「マンション」というのは本来の正しい意味から外れた和製英語だという指摘を耳にすることがあるが、実際には「マンション」はヴィクトリア朝後期に新しい集合住宅に対して使われ始めめていた。階級意識の高いイギリスで、より高級感ある印象を与えるためにこのような呼び方が好まれたのだ。1905年までには集合住宅の名前にマンションやガーデンとつけるのはありふれたことになっており、「“mansions”という言葉はかなり前から邸宅という意味ではなくなったし、“gardens”と聞いても人々は庭があるものと期待しなくなった」という(Perks, 204)。ギッシングのマンションも例外ではなく、彼が住んでいる間に“Cornwall Residence”は“Cornwall Mansions”へと改名された。1888年7月に改名の通達を管理人から受け取って、ギッシングは次のように手紙に書いている。

Amusing piece of flunkeyism. Tonight comes a circular from Lane, informing me that henceforth “Cornwall Residences” will be “Cornwall Mansions.” Eheu!

(To Algernon, July 23 1888, *Letters* 3: 228)

このマリルボンの Cornwall Residence からクラーケンウェルまで、ギッシングが執筆前や執筆中に何度も足を運び、街の様子を取材していたことが彼の手紙や日記から窺うことができる。早くは1887年に作家のトマス・ハーディに宛てた手紙に次のように書いており、クラーケンウェルを舞台にした小説の案が既に頭に浮かんでいたことが分かる。

I have something in hand which I hope to turn to some vigorous purpose, a story that has grown up in recent ramblings about Clerkenwell[.]

(To Thomas Hardy, 25 July 1887, *Letters* 3: 139)

1888年3月19日に執筆を始める少し前の2月5日の日記には、“Evening spent in Clerkenwell, wandering.”(*Diary*, 21)と書かれている。3月29日には“Morning spent in Clerkenwell.”(*Diary*, 25)と日記に書き、4月に書いた家族への手紙には

I must have a walk this morning to Clerkenwell, to catch one or two Sunday aspects.  
(To Catherine Gissing, 15 April 1888, *Letters* 3: 201)

とある。6月24日にも、“In evening to Clerkenwell Green”(*Diary*, 34)といった具合で、度々クラークンウェルを見学しに行っているのである。

このような取材を元にしたクラークンウェルの正確な描写のおかげで、ギッシングはこの街の雰囲気を実感に伝え、そこに生活する人々に存在感を持たせることに成功しているのだが、ひとつ疑問なのは、なぜ、クラークンウェルだったのか、という点である。現在のクラークンウェルは、金融街シティからほど近く、ファリンドン駅があることから交通の便も良く、スタイリッシュでおいしいレストランの多い、最先端のお洒落なエリアとして知られている。しかし、ギッシングの時代のクラークンウェルは、今の姿とは大違いだったようだ。本稿では、『ネザー・ワールド』のクラークンウェルについての記述を丁寧に検証し、ギッシングが物語の舞台をクラークンウェルに設定した理由を考えてみたい。

\* \* \*

『ネザー・ワールド』の第2章の始まりも、クラークンウェルの描写である。ある日の夕方、労働者たちの終業時刻ころの街の様子の描写に丸々2ページを充てたところで、やっと主人公ジェインが登場する。ジェインはヒューウィット夫人から言伝を頼まれて、St. John's Square (写真2)の宝石商で

働いているシドニーに会いに来たのだった (*Nether*, 12)。St. John's Square については、4章でさらに詳しい描写がある。

Of all areas in London thus defined, this Square of St. John is probably the most irregular in outline. It is cut in two by Clerkenwell Road, and the buildings which compose it form such a number of recesses, of abortive streets, of shadowed alleys, that from no point of the Square can anything like a general view of its totality be obtained. . . . The archway has a sad, worn, grimy aspect. So closely is it packed in among buildings which suggest nothing but the sordid struggle for existence, that it looks depressed, ashamed, tainted by the ignobleness of its surroundings. (*Nether*, 51)

シドニー以外の登場人物の職業についても、ギッシングは細かく設定し記している。たとえば、ボブは金型加工職人（その技術を使って、のちに貨幣偽造の罪を犯してしまう）、ペネロペ（通称ベニーロウフ）は造花工場に勤めているのだが、実際にクラークンウェルは宝石や時計などの宝飾品の加工のような高い技術をもった職人の街として栄えたのだった。『モーニング・ポスト』紙の記者だったジョン・ホリングスヘッドによると、1860年頃のクラークンウェルでは、時計や造花などの製造業や出版、製本業が盛んだったという。

Watch and watchcase making trades form the chief occupation of the men, and the women and children work at artificial flower-making and mantle-making &c. for the City warehouses. (Hollingshead, 18-19)

19世紀半ばまでは大変盛んだったクラークンウェルの製造業ではあるが、1880年代までに、郊外の工場で大量生産された製造品との価格競争の激化

や、ロンドンの地価上昇で打撃を受けた工場や工房の多くがクラーケンウェルから地方へと出て行ってしまっていた。盛んだった時計や宝石の製造も急激に衰退してしまい、住民の多くが職を失ってしまった。しかし、チャールズ・ブースの“Trades leave, people stay.”という言葉の通りで、製造業者や工場がクラーケンウェルを離れた後も、住民たちはそこで暮らすほかなかったため、彼らは加速度的に貧しくなっていったのだ。19世紀末になるころには、クラーケンウェルでは男性の失業率が高く、家計を支えるためにどんな仕事でも請け負った女性は安価な労働力として搾取されるようになり、ますますスラム化が進んでいったのである (Jones, 154)。

『ネザー・ワールド』でも、物語が始まる1879年頃には職人として誇りを持って仕事をし、まともな給与を得て慎ましくも楽しく生活していた登場人物たちが、物語が進むうちに職を失ったり、より安い収入しか得られなくなったりして、生活が荒んでいく様子が描かれている。たとえば、ジョン・ヒューイットは若い頃は腕のいい家具職人だったが、今では日雇い労働でその日暮らしをせざるを得ない。その日雇いの仕事でさえもなかなか見つけるのが難しく、52才のジョンは白髪を染め、不自然な若作りをして職探しに出かけていくのである (Nether, 19)。何か悪いことをしたわけでもないのに、運命に弄ばれるかのように安定した生活を失い、貧困へと転がり落ちていく人々の姿が1870年代から1880年代のクラーケンウェルにはたくさん見られたのだろう。ギッシングがクラーケンウェルを舞台にした理由の1つは、そのような暮らしぶりの変化が著しく見られた場所だったからなのではないかと考えられる。

また、クラーケンウェルのスラム化を加速させたもう一つの大きな要因が、周辺で実施された大規模工事の数々である。クラーケンウェルの南部のサフロン・ヒルやフィールド・レインは1830年代、チャールズ・ディケンズが『オリヴァー・トゥイスト』の舞台として描いたことから、ロンドンで最も悪名高い場所となっていた。サフロン・ヒルやフィールド・レ

インの犯罪や疫病を撲滅する目的で1840年代にその一帯のスラム街は取り壊され、ファリンドン・ロードという大通りを貫通させる大工事が行われた。1857年9月の新聞『タイムズ』によると、ファリンドン・ロードを作るために1600戸が取り壊され、その結果16000人が住む家失ったのだそうだ。そして、彼らが住む場所を求めて、近隣のクラークンウェルに流入してしまったので、結果として今度はクラークンウェルのスラム化が深刻化したのだ。1861年にはクラークンウェルのスラム街では、一部屋あたりに6.5人が暮らしていたほど人口が過密していた (Tames, 113)。

さらに、鉄道がロンドン市内まで延長され、1863年にファリンドン・ストリート駅が完成し、さらに世界発の地下鉄であるメトロポリタン線の工事も終わり、1863年1月にファリンドン・ストリート駅とパディントン駅の間で開通していた。このような中、クラークンウェルへの人口流入と過密化は歯止めがかからなくなっていたのだ。ホリングスヘッドによると、クラークンウェルの中でも最も人口過密な場所だったのは Clerkenwell Close だった (写真5)。『ネザー・ワールド』でも Clerkenwell Close は重要な場所である。物語のはじめで、ジェインやクレム、ヒューイット一家といった主要な登場人物が住んでいるのが、Clerkenwell Close にあるベックオーヴァー夫人の下宿屋なのだ。この下宿屋には数世帯の合計13人以上が暮らしていた (Nether, 21)。この数字は現実通りとすることができるだろう。1870年代に入ると、今度はクラークンウェル内のスラム街の風通しを良くさせる目的で Clerkenwell Road が作られたのだが、このときにも住まいを追い出された人々は、すぐ近くのクラークンウェル内の別のスラム街へと流入したのだ。1880年代に労働者階級の住居に関する王立委員会が調査対象として真っ先に選んだのが、クラークンウェルだったのだというが、それほどまでにクラークンウェルの人口過密度状況は深刻になっていたのである。

スラム街の問題が表沙汰になったときには、問題解消のために“slum clearance” (スラム街一掃) が行われたのだが、『ネザー・ワールド』でも、

クラークンウェルの中でも最悪のスラム街の Shooter's Gardens もスラム街一掃計画の対象となっている。作品中、唯一架空の地名の Shooter's Gardens を追い出される日を目前にして、住民たちは悲壮感に暮れるのだ。

This winter was the last that Shooter's Gardens were destined to know. The leases had all but run out; the middlemen were garnering their latest profits; in the spring there would come a wholesale demolition, and model-lodgings would thereafter occupy the site. (Nether, 248)

1840年代のスラム街一掃では、ただ建物が解体されたただけだったのだが、1870年代以降は、スラム街一掃で失われた住居を補完するための新しい集合住宅の“model-lodging”が解体してすぐに建てられるようになった。『ネザー・ワールド』の中でも、Farringdon Road Buildingという実在したmodel-lodgingにヒューイト一家が移り住むようになっている。ただし、ここでもギッシングの目は厳しい。彼はFarringdon Road Buildingを好意的には見ておらず、次のように描写している。

What terrible barracks, those Farringdon Road Buildings! Vast, sheer walls, unbroken by even an attempt at ornament; row above row of windows in the mud-coloured surface, upwards, upwards, lifeless eyes, murky openings that tell of bareness, disorder, comfortlessness within.

(Nether, 274)

利便性だけを追求し、全く美的でなく、人間性を無視した醜悪な建物だと、ギッシングは嫌悪感をあらわにしたのだった。『ネザー・ワールド』は、スラム化が人間に与える影響や、スラム街一掃事業により破壊されたり、勝手に作り替えられたりするコミュニティを描いている。そのための舞台として、

クラークンウェルほど適当な場所はなかったのではないだろうか。

ギッシングがクラークンウェルを物語の舞台に選んだ3つ目の理由は、ここが歴史的に労働者階級のラディカルな政治運動の中心地であったことだろう。チャーティスト運動の集会は度々 Clerkenwell Green で開かれており、たとえば 1839 年にはチャーティスト運動家の演説を聴くために Clerkenwell Green に 7000 人もが集まり、警察が出動する事態となっていた (Tames, 104)。また、現在マルクス記念図書館になっている建物は、当時は急進的なロンドン・パトリオティック・クラブの本部だった。<sup>3</sup> 『ネザー・ワールド』を執筆していた 1880 年代にも、クラークンウェルでは頻繁にラディカルな政治集会が開かれており、ギッシングも集会の様子を取材しに行っていたことが手紙や日記に記録されている。

Last evening I spent on Clerkenwell Green, -- a great assembly-place for radical meetings, & the like.

(To Margaret, 27 August 1887, *Letters*, 3: 145)

『ネザー・ワールド』の中でも、登場人物たちがラディカリズムにのめり込む様子が描かれている。たとえば、若いころのシドニーは Clerkenwell Green の集会に毎日曜に参加していたという。

In those days, our young friend found much satisfaction in spending his Sunday evenings on Clerkenwell Green, where fervent, if ungrammatical, oratory was to be heard, and participation in debate was open to all whom the spirit moved.

(*Nether*, 53)

3 ここで、亡命中のレーニンがロシア社会民主労働党の機関誌『イスクラ!』を発行していた (1902-1903 年)。

シドニーがジョン・ヒューイトと知り合ったのも、Clerkenwell Green の集会であった。ジョンは熱心なラディカリストだったのだ。

しかし、ギッシングはこうした急進主義的な運動が労働者たちの生活を改善してくれるなどとは期待していなかった。処女作『曙の労働者』(1880年)を書いた頃のギッシングはオーギュスト・コントの唱えた実証主義に傾倒し、「進歩的ラディカリズムの代弁者」であると自負していた。しかし、その情熱も長続きせず、1886年の『民衆』は、社会主義やラディカリズムなどの民衆の運動を嘲る内容となっていた。『ネザー・ワールド』の取材のために Clerkenwell Green の集会を見学しに行ったときにも、労働者たちの運動を否定するような意見を家族に宛てた手紙の中で吐露している。さきほど引用した手紙の続く部分に注目してほしい。

Last evening I spent on Clerkenwell Green, -- a great assembly-place for radical meetings, & the like. A more disheartening scene it is difficult to imagine, the vulgar, blatant scoundrels! . . . May we not live long enough to see Democracy get all the power it expects!

(To Margaret, 27 August 1887, *Letters* 3: 145)

このような労働者たちによる急進主義的な運動を、小説家として客観的に描いてはいたが、ギッシングは決してそれを支持してはいなかったのだ。結局、ジョン・ヒューイトも、自助の埋葬クラブの積立金を全て盗まれたことで、労働者たちが結束して生まれる力にすっかり幻滅し、ラディカリズムからも足を洗い、Clerkenwell Green の集会に通うこともなくなってしまふ。シドニーも一時的にラディカリズムに熱狂したものの、ほどなくしてその熱も冷めてしまふ。このようなラディカリズムへの労働者の期待と幻滅を描くためにも、物語の舞台はクラーケンウェルでなくてはならなかったのだろう。

以上のように、ギッシングがクラーケンウェルを『ネザー・ワールド』の

舞台に選んだことには、幾つかの理由が考えられた。この街が比較的裕福な職人の街からスラム街へと墮落してしまっていたこと、鉄道やスラム街一掃の工事の影響で近隣からも人口が流入してしまい、スラム化が進んでしまったこと、そして労働者階級の人々のラディカリズムの中心地であったということ。街の様子の詳細で正確な描写と、クラーケンウェルの住民のどん底の暮らしのリアリスティックな描写のため、『ネザー・ワールド』は19世紀末の労働者たちの暮らしを描いた力強い作品となっているのだ。

それにしても、『ネザー・ワールド』という作品には救いが無い。スラム街一掃による住環境を改善しようとする試みも、労働者たち主体の急進主義的な運動も、慈善運動家による介入も、クラーケンウェルでは何の役にも立たないものとして描かれ、人々の生活は少しも良くなる。徹底して悲観的なのである。しかし、実際にクラーケンウェルに暮らしていた労働者階級の人々にとっては、これが現実だったのではないだろうか。マンチェスタの売春婦として知り合い、その後結婚したネルとの生活はうまくいかず、彼女はギッシングのもとを去ってしまう。そのネルがランベスのスラム街で悲惨な死を遂げたことが、『ネザー・ワールド』を書くひとつの直接的なきっかけであった。1888年3月1日、彼女の死の状況を知ったギッシングは次のように日記に決意を書いている。

Henceforth I never cease to bear testimony against the accursed social order that brings about things of this kind. (Diary, 23)

そして、ネルの死の2週間後から『ネザー・ワールド』の執筆を始めたのだった。何度禁酒を誓っても、アル中のネルは酒代欲しさに売春に戻ってしまっていた。ネルは、下層階級の人々が一旦どん底に落ちたらそこから這い上がるのがいかに難しいかをギッシングに教えてくれていた。同じように下層階級の題材を描いたディケンズの作品にはユーモアや救いがあったのだが、

ギッシングは徹底して悲観的だった。彼は、クラーケンウェルの下層階級の人たちの暮らしをまっすぐ見つめ、彼らに訪れた時代の変化の冷静な目撃者となり、ただひたすら客観的に小説を描いたのだろう。



<写真1>

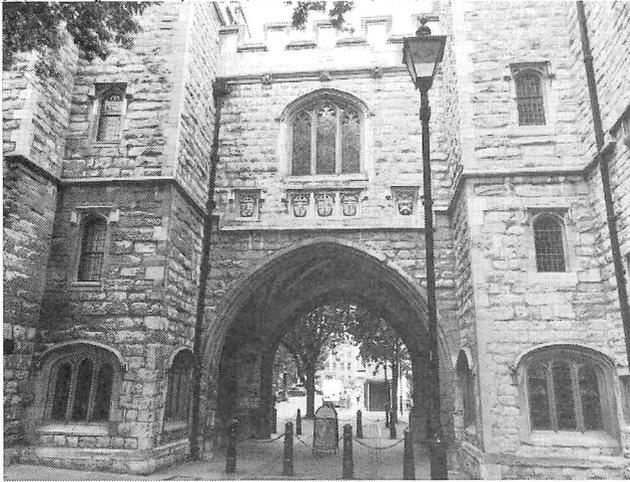
1872年のCornwall Mansions。2008年に解体された。

(*Mobilising Housing History: Learning from London's Past*より)



<写真2>

現在の St John's Square (2019年8月筆者撮影)



<写真3>

現在の St. John's Gate (2019年8月に筆者撮影)。



<写真4>

ファリンドン駅近くの古い建物 (2019年8月筆者撮影)。最上階は太陽光を目一杯入れるために明かり採り用の窓がたくさん作られている。その昔あった時計工房の名残りである。



<写真5>

Clerkenwell Close (2019年8月筆者撮影)。



道の幅が狭く、

<写真6>

Clerkenwell Green (2019年8月筆者撮影)  
 右手に見えるのがマルクス記念図書館。

<参考文献>

- Allen, Michelle. *Cleansing the City: Sanitary Geographies in Victorian London*. Athens: Ohio UP, 2008.
- Gissing, George. *The Nether World*. 1889. Oxford: Oxford UP, 1992.
- . *The Collected Letters of George Gissing: 1886-1888*. Paul F. Mattheisen, Arthur C. Young, and Pierre Coustillas, eds. Athens: Ohio UP, 1992.
- . *London and the Life of Literature in Late Victorian England: The Diary of George Gissing, Novelist*. Ed. Pierre Coustillas. Hassocks: Harvester, 1978.
- Dennis, Richard. "Cornwall Mansions: The Rise and Fall of 7K and its Neighbours." *Gissing Journal* 44.4 (2008) 9-26.
- Hollingshead, John. *Ragged London in 1861*. London: Smith, Elder, 1861.
- Hofer-Robinson, Joanna. *Dickens and Demolition: Literary Afterlives and Mid-Nineteenth Century Urban Development*. Edinburgh: Edinburgh UP, 2018.
- Jones, Gareth Stedman. *Outcast London: A Study in the Relationship between Classes in Victorian Society*. London: Verso, 2013.
- Guillery, Peter and David Kroll, eds. *Mobilising Housing History: Learning from London's Past*. London: RIBA Publishing, 2017.
- Perks, S. *Residential Flats of All Classes*. London: Batsford, 1905.
- Spiers, John. *Gissing and the City: Cultural Crisis and the Making of Books in Late Victorian England*. London: Palgrave Macmillan, 2006.
- Tames, Richard. *Clerkenwell and Finsbury Past*. London: Historical Publications, 1999.
- "The Waste Ground of New Farringdon-street." *Times* 10 September 1857: 5.
- Whitehead, Andrew. "The Nether World—1889." *London Fictions*. London: Five Leaves, 2013.

Woolven, Robin. "Gissing's London Residences 1877-1891." *Gissing Journal* 39.4 (2003)

5-15.

(こみや・あやか 商学部教授)